

日本近代文學紀行

—— 西 部 篇 ——

福 田 清 人 著

ONE HOUR LIBRARY

日本近代文學紀行
西 部 篇

一 時 間 文 庫

昭和二十九年七月五日 發行
昭和三十一年二月十日 二刷

定價 150圓
地方
實價 160圓

著 者 福 田 清 人

東京都新宿區矢來町71

發 行 者 佐 藤 亮 一

東京都新宿區矢來町71

發 行 所 株式會社 新 潮 社

電話東京(34) 7111—8
振 替 東 京 808番

亂丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷 扶桑印刷株式會社 製本 鎌專堂製本所
Printed in Japan

日本近代文學紀行

西部篇

福田清人著



・時間文庫

新潮社版

自序

すでに刊行された「東部篇」の自序にも述べたとおり、この本は、すぐれた作品には、風土と固く結びついたものの多いことから、そうした作品と日本の土地土地のゆかりを主として記している。約二十六年にわたつて、「日本讀書新聞」に連載したものに、さらに稿をおぎなつたものである。北海道に始まつて、東海地方に終つた「東部篇」につづいて、この「西部篇」には、近畿地方、北陸地方より西の日本について描いた。

東部の各地同様に、私は改めてこの目的から旅して行つたり、その機会をえなかつた所は、かつての旅の回想や、文獻によつて記した。

この紀行をひとまず終つた私は、狭い日本ながら、作家とゆかりのあつた小さな町など——たとえば西部で言えば利玄の足守、白秋の柳川、獨歩の岩國、佐伯など、美しい自然となつかしい人情が、ゆたかに残つていることをつくづく感じた。なお山河美し、この祖國や愛すべしの思いもあつた。また當然のことだが、ある作家、作品を理解するには、そのゆかりの土地に足をふみいれてみると、非常にそれが助けられること、また土地によつては、その地の人によつてそこにゆかりのある作家を土地に關連して相當研究されていても、あまり中央に知られていない事實や、それと逆に全然無關心なところもあることなどを感じたことであつた。

あわただしい旅人として、日本全土の文學的要點を通過して行つた私は、さらにより深く究めて行きたい望みも持つてゐる。旅のあいだにお世話になつた人や、資料の提供や、「東部篇」についての批評をいただいた方々に感謝する。

昭和二十九年初夏

福田 清人

目次

一、近畿地方 その一

古都・京都・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・三

長篇の中の京の街・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一九

大津界限・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・二四

二、近畿地方 その二

大 阪・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・三二

兵庫縣下・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・三五

奈 良・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・三七

花の吉野・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四一

三重縣下・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四三

紀州路・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四五

三、北陸地方

北陸本線沿いに……………五

百萬石・金澤の街……………五

能登半島……………六

『虹』の三國……………六

四、山陽地方

岡山縣―内海べり……………七

文學の町・津山……………六

利玄の故郷・足守……………七

『暗夜行路』の尾の道……………七

原爆の街・広島……………七

獨歩の跡―岩國・柳井……………七

山口―萩……………八

五、山陰地方

山陰線沿いに		六九
ヘルンの町・松江		七三
鷗外・抱月の石見		九六
藤村・茂吉と山陰		一〇〇

六、四國地方

内海の濱・三津ヶ濱		一〇七
俳句の故郷・松山		一〇九
宇和島		一二五
香川縣下		一二七
南風の土佐		一三〇
吉井勇と土佐		一三四

七、九州北部

八、九州南部

鷗外と小倉	一九
博多	三二
太宰府附近	三四
白秋の柳河	三六
佐賀縣下	三九
開港場・長崎	四三
森の都・熊本	五一
阿蘇と天草	五二
中津―別府	五九
獨歩と佐伯	六一
日向路	六四
鹿兒島	六八

(東部篇目次)

一、北海道地方

啄木の町・函館

小樽の町

アカシヤの札幌

石狩川

さいはての釧路

二、東北地方

阿武隈川沿いに

浪漫詩都・仙臺

名勝松島・廢都平泉

北上川の畔

孤愁の野・津輕

露月の羽後・茂吉の羽前

三、甲信越地方 その一

高原の町・輕井澤

古城のほとり・小諸

千曲川に沿うて

甲府界隈

富士見高原

歌の湖畔・諏訪

四、甲信越地方 その二

歌入地帯・鹽尻―松本

木曾路

藤村の故郷・馬籠

越後路

佐渡ヶ島

五、北關東地方

利根川べりの平野

近代詩の故郷・上州

赤城―榛名

日光とその奥

愛の舞臺・鹽原

六、東關東地方

常磐線に沿うて

鬼怒川べり『土』の村

太平洋の渚

犬吠岬と銚子

市川―千葉

七、東京舊都内

本郷・上野

淺草・向島界隈

神田・銀座方面

山の手ところどころ

八、南關東地方

武藏野の一角

多摩川べり

相模野

海港―横濱

大島―小笠原島

九、湘南地方

文學都市・鎌倉

『不如歸』の逗子

三浦半島

茅ヶ崎・大磯・小田原

十、伊豆地方

箱根

眞鶴―湯河原

『金色夜叉』の熱海

修善寺―湯ヶ島

伊豆の東海岸

沼津と牧水

十一、東海地方

富士山の文學

駿河路

靜岡近在

名古屋

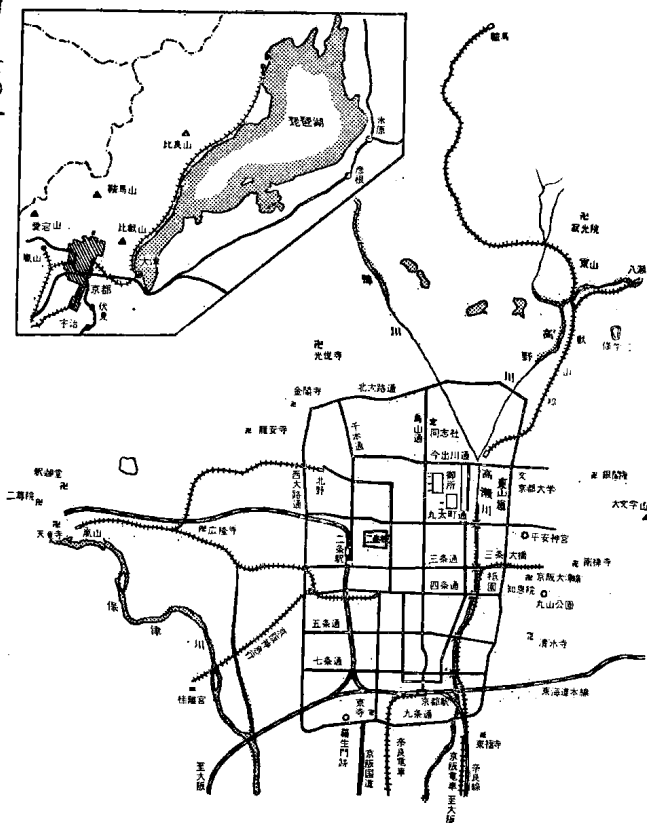
岐阜縣下

日本近代文學紀行
(西部篇)

口繪寫眞

芳	入	樋	濱
賀	江	口	谷
日	泰		
出	吉	進	浩
男	(奈	(親	(足
(犀	良)	不知)	摺岬)
川)			

近畿地方 その一



近畿地方は古典文學地帯である。奈良地方を中心とする上代文學、京都を中心とする平安朝、室町文學、大阪を中心とする元祿文學等、古典文學の場はほとんどこの地方であつた。従つてここに開花した近代文學も、この古典のしみいる古雅な風土への憧憬が、その根にあるものが多い。多くの作家はこの山河遺跡を訪ね詩文を残し、なかには志賀直哉、谷崎潤一郎、吉井勇等のように長く住みついた人々もあつた。また元祿文學の血をひく大阪や、同志社、京都大學は近代文學に光彩をそえる作家を出した。

古都・京都

この都の持つ四圍の自然や、王朝の日をそのままその名に残す街路、古社寺、名園、加茂川の流れ、年中行事等この地くらしい紀行・隨筆に書かれた所は他にない。こうした文章を集めた本も幾冊かでてゐる。今、その一冊天野忠編『京都襟記』（昭和十八年）の隨想・小品欄を見ても、

京都（谷川徹三）山の都（田山花袋）京都の自然（田部重治）艶なる空（土田杏村）京の春（大和田建樹）京に着ける夕（夏目漱石）桃山と嵐山（徳富蘆花）京都の宿（島崎藤村）宇治は茶どころ（モラエス）比叡（若山牧水）永遠なるもの——桂離宮（ブルーノ・タウト）桂離宮の歌（中村憲吉）清水寺にて（ビエル・ロチ）知恩院の鐘（與謝野晶子）祇園の枝垂櫻（九鬼周造）年末年始（水上瀧太郎）東福寺の秋（長興善郎）京の雨（瀧井孝作）廣隆寺と繪と宿（井伏鱒二）京の冬を懷しむ（近松秋江）聚光院と高桐院（室生犀星）石庭（北川桃雄）葵まつり（荻原井泉水）時代祭（中谷孝雄）太秦の牛祭（木下利玄）

と豊かにこの古都の情景が描かれているが、我々は近代小説に反映したこの街を探ろう。その發生に同志社と三高、京都大學の存在はやはり力となつてゐる。

同志社は新島襄によつて明治八年十一月開校式をあげられたが、十一年兄猪一郎に伴われ徳富蘆花が入學した。しかし十三年中退、十九年に復籍した。『黒い眼と茶色の眼』（大正三年）は、作者がここに在學中、「茶色の眼」の持主襄夫人の姪山本久榮との初戀が、「黒い眼」の新島校長等

にさまたげられ、悲戀に終る自傳小説で、同志社は協志社、作者は敬二、山本久榮は山下壽代という名で登場する。

月明りに薄蒼い東山、いつも見る如意ヶ嶽の胸一ぱいに月の光を馬鹿にした大きな朱色の點を連ねた大の字が、とろ／＼と燃ゆる珊瑚の様に揺らいで居る。人の燃すものとも見えぬ活きた朱の大の字は、今それを眺むる洛中洛外幾萬の人さま／＼の眼の前を、そよぐ風のまに／＼ゆらく／＼と右に流れ、ちら／＼と左に靡き、また立直つて眞直にひた燃えに燃え焼つて居る。

無言の二分時。

と八月十六日の大文字山の火燒きを、木屋町の寄寓先から二人眺める場面や、逢引の場面を南禪寺境内に用いたり、明治二十年の頃の京都の風物も描かれている。

高濱虚子が郷里松山から三高入學のため京都に來たのは、明治二十七年であつたが『俳諧師』（明治四十一年）には三年繰上げ二十四年のことにして「吉田町の専門の下宿でも一ヶ月三圓五十錢それで十二疊の大廣間を一人で占領してゐるやうな時代」と記している。印象的なのは主人公三藏が雪の日郊外の寂光院を訪ねた時の描寫である。

四邊は寂莫として靜かだ。耳を澄ますと僅かに木魚の音が聞える。三藏は暫く黙つて其木魚の音を聽いてゐたが、寒さが足の尖まで浸み渡るやうに覺えた。寂光院は尼寺の筈だ。人の世に負いた尼が人の世に柵を隔て門を鎖して、斯る寒き雪の日をも行ひ澄してゐるのかと思はれた。木魚の音は靜かに響く。三藏は終に戸の透きに口を當てゝ案内を請うた。

「御免。」「頼みます。」と幾度呼んでも返辭がない。木魚の音が尙靜かに聞える。

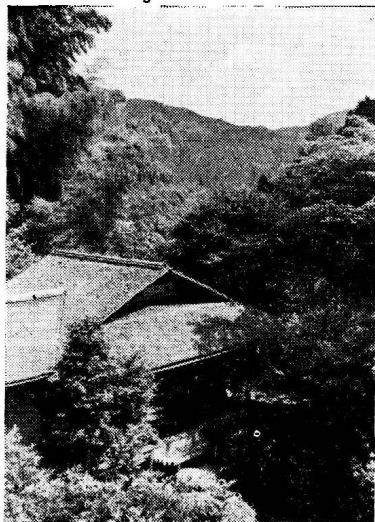
こうして、ようやく現れた十七、八の尼の案内で御堂の内を拜観させてもらうのであるが、源平盛衰記や謡曲の中の大原御幸の文句が蘇る一方、尼の姿もはつきり浮んでくる。他に虚子の「風流懺法」（明治四十年）は叡山であつた無邪氣な小僧に、更に祇園のお茶屋で會う。その舞妓たちの可憐な姿も、寫生文風に描かれ、京の雰圍氣をかしだしている。

かにかくに祇園は戀し寝るときも枕の下を水の流るゝ
吉井 勇

京の街の魅力には、こうした花街の情緒もある。

明治四十五年四月、谷崎潤一郎は、大毎、東日兩紙に京阪見物記を連載する約束で初めて京都へでかけ『朱雀日記』を書き、七月まで滞在、すでにこの地にきていた長田幹彦と行を共にして盛んに遊んだ。潤一郎著『青春物語』（昭和八年）幹彦著『青春時代』（昭和二十七年）は當時の様子を語っている。

幹彦はこの間に『祇園夜話』を書き廣く讀まれた。反自然主義耽美派の一面を示したのであつたが、赤木柝平の『遊蕩文學の撲滅』（大正五年）にその典型なものとして槍玉に上つた。作者はむしろそ



寂光院